

団体・組織の概要

※太枠内、必須事項。その他は、該当する項目を記載してください。

団体/会社名	財団法人 地球・人間環境フォーラム		
代表者	炭谷 茂	担当者	飯沼佐代子
所在地	〒113-0033 東京都文京区本郷 3-43-16 成田ビル 3F TEL:03-3813-9735 FAX: 03-3813-9737 E-mail:iinuma@gef.or.jp		
設立の経緯 ／沿革	地球・人間環境フォーラム(GEF:Global Environmental Forum)は、1990 年 5 月に発足した環境団体で、地球環境問題に関する科学的調査・研究、その成果の普及・啓発、政策提言に取り組む非営利の環境団体。気候変動、森林減少、砂漠化など幅広い地球環境問題の解決や持続可能な社会の構築に向けて、行政、企業、NPO・NGO、メディアなどとの連携・ネットワークづくりを進めながら、分野横断的に取り組んでいる。		
団体の目的 ／事業概要	目的：地球環境問題の調査・研究と普及・啓発、政策提言。 事業概要：調査研究活動のテーマとしては、大気環境・気候変動、持続可能な森林管理、砂漠化対処、水生生物による干潟浄化、開発途上国における企業の社会的責任、開発プロジェクトと金融機関などの分野に主に取り組む。普及啓発活動として、これらの分野に関するセミナー等の開催、機関誌（月刊）『グローバルネット』の発行、環境コミュニケーション大賞等の実施、さらには地方自治体や企業、ジャーナリスト等さまざまなセクターにおけるネットワーク支援活動などを行っている。		
活動・事業実績 (企業の場合は 環境に関する 実績を記入)	●政策的調査研究 ・リユースカップ普及促進調査 ・持続可能な森林経営に向けた国際的な行動規範等策定調査業務（環境省委託事業／平成 18 年度） ・環境問題に関する OECD 加盟国等の貿易保険制度調査（経済産業省委託／平成 18 年度） ・生物多様性・地域社会共存型の海外森林保全事業モデルの確立と、炭素クレジット等へのビルトイン手法の検討（環境省 NGO/NPO 企業環境政策提言優秀提言）など ●地域と連携した環境活動 ・文の京エコスクール大作戦など ●提言活動 ・フェアウッドキャンペーン（2003 年～） ・バイオ燃料の持続可能性に関する共同提言（2007 年 2 月） ●各種表彰制度の実施		
ホームページ	http://www.gef.or.jp/		
設立年月	1990 年 5 月	*認証年月日（法人団体のみ）	1990 年 5 月 10 日
資本金/基本財産 (企業・財団)	基本財産：1,183,500,000円	活動事業費／ 売上高 (H17)	円
組 織	スタッフ／職員数 約 40 名（内 専従 40 名） 個人会員 名 法人会員 名 その他会員（賛助会員等） 名		

政策のテーマ

身近なモノのライフサイクルアセスメントを通じた
「暮らしと生物多様性のつながり見える化」ツールの開発と普及

■政策の分野

- ・循環型社会の構築（ライフスタイルの見直し）
- ・自然環境の保全（生物多様性保全）
- ・環境パートナーシップ（環境教育）

■政策の手段

- ・調査研究・ライフサイクルアセスメント・評価手法の確立・環境教育教材の開発

団体名：地球・人間環境フォーラム

担当者名：飯沼佐代子

■キーワード	生物多様性	見える化	ライフサイクルアセスメント	エコロジカルフットプリント	教材
--------	-------	------	---------------	---------------	----

① 政策の目的

本提言では、市民生活が多様な面で生物多様性に支えられていることを理解するためのツールとして、身近な物のライフサイクルアセスメントを通じ、生物多様性と暮らしの関係を“見える化”する手法を検討する。その手法を社会教育・学校教育の中で活用可能な教材に発展させることで、一部の専門家や環境に関心の高い人だけでなく、一般の児童・生徒・市民が生物多様性と暮らしのつながりを理解し、生物多様性の保全を意識したライフスタイルを選択するきっかけとなることを目的とする。

② 背景および現状の問題点

■一般的な認知度と理解の低さ

気候変動枠組み条約と同時に生まれた双子の条約、生物多様性条約によってその重要性を世界に認識されつつも、普及啓発においても対策においても生物多様性への取り組みは出遅れてきた。温暖化問題は、市民の関心が高まり、日常生活でも節電やクールビズなど行動に結びつくことが増えてきたが、生物多様性はその認知度もまだ低く、言葉は知っていても「意味が分かりにくい」、「大切だとわかっても何をすればいいのかわからない」といった声がよく聞かれる。

■市民の理解の重要性

2010年名古屋でCOP10が開催されるのを機に、東京と名古屋では「生物多様性」を冠したイベントや取り組みが急増している。しかし数値が明示されイメージもつかみ易い温暖化と異なり、内容が複雑で分かりにくいとの指摘が多い。生物多様性保全においても、行政や企業だけでなく市民の間で認識と取り組みが広がることが重要で、市民の理解と支持なくしては、企業や行政の取り組みも空回りする可能性がある。

■生物多様性の見えにくさ

農山漁村など一次産業を基盤とする場所で生活している人は、日常的に「自然の営みに支えられている」ことを感じやすく「生物多様性」という言葉を知らなくとも、少しの解説でその重要性を理解し得ると考えられる。しかし都市生活者、特に町育ちの若者・子供は、日常生活の中で自然に触れる機会も少なく、「自然の恵みに生かされている」という意識が薄く、「生き物のつながりが大切」と言われても実感がわかないのが普通である。当方が実施した生物多様性に関するワークショップでも、生物多様性ということばかり連想するイメージとして「外来種」「希少種」「保護」など、生活とは離れた言葉が多く挙げられ、生き物のつながりという面や、生物多様性に支えられているという認識が低いことがうかがわれた。

■ビジネス界の先進的取り組み（見える化）から市民向けの普及啓発へ

「なぜ生物多様性を保全すべきなのか」が理解され、保全への行動に結びつくためには、生物多様性が私たちの暮らしを支えていることが市民に認識される必要があり、そのためには生物多様性と暮らしのつながりを「見える化」することが重要である。

しかしビジネス界では受け入れられている生態系サービスという概念や、現在試みられている「見える化」の手段である「生態系と生物多様性の経済学（TEEB）」をそのまま用いて、多くの市民に生物多様性への関心を高めてもらうのは難しい。ビジネス界の先進的な取り組みを応用しつつ、市民の視点で身近なもの、毎日食べ、使っているモノが自然の恵みであることを知り、生物多様性とつながっていることを実感することから、生物多様性への関心が高まり、それを守り、共存していこうという気持ちが広がる可能性があると考えられる。

③ 政策の概要

本提言では、生物多様性の重要性と自分とのつながりを理解し、保全のための具体的な行動をするようになるため、以下のような過程をもって「生物多様性と暮らしのつながり“見える化”」ツールを開発し、教育機関等での研修・授業を通じて活用する。

- 1) 生物多様性と暮らしのつながり見える化検討委員会を設置
- 2) 生態系と生物多様性の経済学（TEEB）の内容を市民向けに応用するための検討
- 3) 生物多様性のつながり見える化検討（１）－生態系ピラミッドを使って
- 4) 生物多様性のつながり見える化（２）－生物多様性と暮らしの関係性マップ作成化検討
- 5) 上記を活用し生物多様性と暮らしのつながりを理解するための教材化
- 6) 教材を活用した研修・授業の実施による「生物多様性の見える化」普及

④ 政策の実施方法と全体の仕組み（必要に応じてフローチャートを用いてください）

1) 「生物多様性と暮らしのつながり見える化」検討委員会の設置
生態学研究者、生物多様性の普及啓発に関心を持つNPO、環境・開発教育に関わる専門家とNPOなど、生物多様性と暮らしのつながりの見える化と教材化に必要な情報を有する有識者からなる検討委員会を設置し、以下の項目については検討委員会に審議しつつ進める。

2) 生態系と生物多様性の経済学（TEEB）の内容検討
2010年夏に最終報告が出される見込みのTEEBの市民向けパート(D4)の内容を検討し、市民や学生・児童向けの「生物多様性と暮らしの関係性“見える化”」に活用できる部分について参照する。

3) 生物多様性のつながり見える化検討（１）－生態系ピラミッドを使って
生物のつながりの基本は食物連鎖であるが、市民が生活の中で食物連鎖を意識することはほとんどない。生き物が生きていくために、どれだけ他の命を消費するのか、数量を明らかにし、それを目に見える形で示すことで「生きるための消費量」について実感を持たせる。例えばシジュウカラのヒナ1羽が育つのに必要な幼虫の数、それらの幼虫が育つのに必要な木の葉の量、という連鎖を数字だけでなく視覚的（幼虫50匹のイラストなど）に示し、それを生態系ピラミッドの階層毎に明示することで、高次の捕食者を支えるためにどれだけ生き物が必要かを視覚化し、ピラミッドの安定性のためには多くの生き物がたくさんいることが必要であることの感覚的な理解を促す。

4) 生物多様性のつながり見える化（２）－生物多様性と暮らしの関係性マップ作成
上記3)で検討した生態系ピラミッドを人間とモノのつながりに応用し、身近なモノから「生物多様性と暮らしの関係」を明らかにする。食べ物や生活必需品などを例として数種類選択し、それらの生物多様性との関連という面からのライフサイクルアセスメントを行う。原料調達・製造・流通・消費・廃棄の各段階での生物多様性とのつながり（資源利用、生物の関わり、環境への負荷等）を個別に解明する。例えば1日3食で食べるコメは稲何株で水田面積にすると何アー

るか、その生産のために投入される肥料や農薬は生き物とどう関係するか、その水田にはどれだけの生き物が生息しているか、あるいは携帯電話などがその生産から廃棄までの過程でどう生物多様性につながるかをマップにして視覚的に示し、エコロジカルフットプリントとの関係も盛り込む。検討にあたっては「企業と生物多様性イニシアティブ（JBIB）」が作成した「企業と生物多様性の関係性マップ」、「農と自然の研究所」による「生物指標ガイドブック」等を参照する。

5) 生物多様性と暮らしのつながりを理解するための教材化

上記3) 4) において検討された生態系ピラミッドと生物多様性と暮らしの関係性マップを、企業研修や大学、学校等で使用可能な教材に発展させる。開発・環境教育の教材を作成・活用してきた開発教育協議会などの協力を得て、ゲーム性があり、ワークショップを想定したものと、合わせて生物多様性の基本的な知識への理解が深まるようなテキストを制作する。1) で検討したTEEB のような経済的な仕組みによる取り組みにもテキスト内で解説を加える。教材についてはWeb 上で公開するとともに、各地の環境教育団体等に広報して活用を促す。

6) 教材を活用した研修・事業実施による「生物多様性の見える化」普及

CBD 市民ネットワークや JBIB、環境教育フォーラム等、生物多様性に取り組むネットワークを通じて研修先を公募し、作成した教材を社員研修、動物園や博物館等の社会教育の場、大学・学校教育の場で活用するとともに、フィードバックを受けてワークショップの中身を改善する。

⑤ 政策の実施主体（提携・協力主体があればお書きください）

地球・人間環境フォーラム

協力団体（全て予定）

生物多様性条約市民ネットワーク普及啓発部門

企業の生物多様性イニシアティブ（JBIB）

開発教育協議会（DEAR）

保全生態学の専門家

⑥ 政策の実施により期待される効果（具体的にお書きください）

- 1) 生態系ピラミッドを用いた食物連鎖を私たちの食生活と生物多様性、生産地との関係の見える化の具体例が示される。
- 2) 市民に身近な物のライフサイクルアセスメントを通じ生物多様性と暮らしの関係の“見える化”の具体例が示される。
- 3) 「生物多様性と暮らしの関係」をテーマにした、ゲーム性がありかつ自分でつながりを考えていくワークショップ形式の教材が作られ、各地で活用される。
- 4) 企業、学校、社会教育施設等でのワークショップを使った研修を通じて、参加者に生物多様性についての基本的な理解と、生物多様性と暮らしの関係が認識される。
- 5) 生物多様性と暮らしの関連について、考えるヒントをワークショップで得た市民が、生物多様性に配慮した生活とは何かについて考え、実践する市民となる。

⑦ その他・特記事項

特になし。